



経営の散歩道

川中経営研究所
所長 川中 清司

▼九月、まだまだ暑い日がつづく。夏と秋の「接点」——だからセツテンバー。

セプトはセブンで七の意味。セプテートは七重奏というように七を表している。セプテンバーはその昔、七月だった。

▼話は二千年前、ギリシア時代にさかのぼる。ローマの権力者たちは、自らの存在を暦のうえにまで誇示した。

英雄ジュリエス・シーザーは七月(ジュライ)に、皇帝アウグストスは八月(アウガスト)にと、二カ月にわたって割りこむ。そのため、七月のセプテンバーが九月となり、八月のオクトーバーは十月にと、あと送りさせられた。曆まで支配した権力の巨大さは想像に絶する。

▼現代の権力者・イランのホメイニ師が、国連の停戦決議の受諾を声明した。八年も続いたイラ・イラ戦争が一举に終結にむけて動きだした。

「毒を飲むより苦しい」という師の声明は、日本のポツダム宣言受諾と、「忍びがたきを忍び」の、終戦の玉音放送を思い起こさせてならない。

すでに数百万万人の死傷者を出し、自らは癌におかれ、国内経済はどん底の窮状に陥っている。



た。追いこまれた事態の中での権力者の決断が、時の流れを急転換させる。

▼いま日本は、「民活」が時代を動かす。パワーは市民だ。

「活性化」ばやりのこの頃だが、その根底には、人間尊重の路線が貫かれていなければならぬ。

バイタリゼーション(VITAL A)は、生命の復活を意味する。「活性」とは、もともと化学用

語で、分子や原子が衝突して示す反応、活発な性質をいうものだ。

人間同士の活動する力・エネルギーの量が「活力」であり、その活力こそが、組織や社会の質を、マンネリから躍動へと転換する。それが活性化だからである。

そこには「量から質への発展」の、社会法則が働く。

「活性化計画」には理念がほしい。現実性の乏しい思いつきや、経済性と便利さだけが優先する、目先だけの近代化メニュー

第三回

パンの香り

ーでは頂けない。

▼街の活性化の原点は、キラリ光る商人たちの心意気だ。

心の暗い或る雨の朝、重い足どりの街角で、ぶいんと漂うパン作りの香りが、どれだけ安らぎを与えてくれたことか。

「木村のパン屋さんはどこですか」。近づいてきた車から、いきなり問いかけられた。わざわざ敦賀から評判をきいて買いに来たという。

ヨーロッパ・キムラの食パン「ハーフ」は、ドイツで学んだ伝統技法のうえに、アメリカ風な焼き上げで、塩は天然塩、保存料は一切つかわない。独創の味が、県外からの根強い人気を呼んでいる。

フランス大使館に招かれて焼いたりする腕は拔群だ。

軍旗と鯖江三六聯隊をデザインした、帝国陸軍のかたパンに「戦友」たちは涙ぐみ、毛筆で礼状がくるほど喜ばれている。

▼日本の小売総額は約百兆円。そのうち、ダイエー一兆六千億円を筆頭とした上位二百社が、二十七%を独占している。

どこへ行っても郊外大・中型店ばかり。まちの中心商店街は、駐車スペースに欠け、次第に客足が遠のいている。このままでは、ダウンタウン(中心部)がゴースト化したアメリカの先例をたどる危険もある。

▼祭りや季節の催しものなど、地方の伝統や文化を支えてきた市民商人の力は大きい。活き活き商人のバイタリテイが、街づくりの源泉となつてほしい。このまちに、この店ありて楽しと。